

横浜桐蔭大学 森 朋子

はじめに

皆さま、こんにちは。桐蔭学園の森でございます。

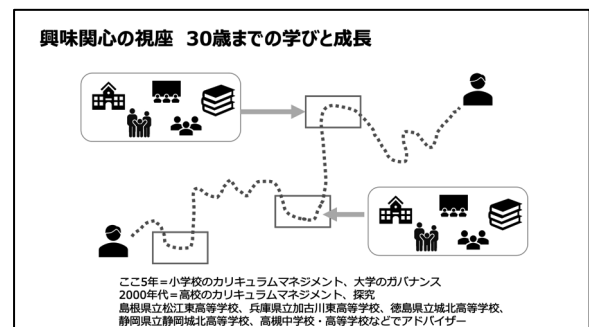
私が自律的学習者をすごく重要だと思っている背景にはいくつか理由があります。今は私、大学生を中心に仕事も研究も行っていますが、4年間で育つのかということに関しては、大変疑問があります。そうすると、じゃあ高校から大学を考えよう。でもそれでも間に合うかな。じゃあ中学校、そして小学校ということで、やはりこういったトランジションは、私はいわゆる私立学園に大きなアドバンテージがあるのかなというふうに思っています。

自己紹介をさせていただきます。私は、今、桐蔭学園の小学校の校長と学長を兼ねています。私の専門でございますけれども、主に成人の学び、つまり、もう自分で判断ができるという年齢の学習者の学びを主にやっていたので、高等教育研究ということになります。この高等教育研究の結果が、この下にずらずらって書いてある中教審であったりとか大学設置・学校法人審議会だったりとか、いろんなところで政策にも関わらせていただいております。そういう意味では実感としましては、先ほどと全く一緒です。大学4年間で何ができるのかっていったら、これ、できないよねというところで、そういう意味では、小中等教育の中教審とも連動していかなくちゃいけないかなというふうに思っています。

そして私の研究の視座でございますけれども、学習の観点からということですね。先生がたは教育学の関係なんですけれども、教育と学習って

うのは、実は裏表の関係ということで、その辺も少しお話しできたらなというふうに思います。今回の私のベースが、実は研究ベースではなくて実践ベースの話になります。ですので、またご興味があればいろいろとディスカッションさせていただきます。

私の研究の視座、もう一度お話をしたいと思います。このような形で学習者がいるとします。こ



の学習者がこのような形で、学びが深まったり成長したりというところの過程がどうなっているのかなってということですね。これは一直線に伸びるわけではなくて、いろんなところにいろんなことが起き得ると。例えば、こういうところに何があったのかなとか、こういうところに何があったのかなと。そしてもっと言えば、こういうところって何があったのかなってということなんですよ。ですので、ここに学校の影響なのか、家族の影響なのか、またはクラスの影響なのか、または友達関係の影響なのかと。こういったようなものを調べていく。これが私の研究になります。ですので、これを説明するために、いろんな学習理論を使っていくということになりますから、自律的学習者の自律ばかりやっているわけではないということなんですね。いろんなことを使いながら、この

1 人の学生たち、または子どもたちの成長のさまざまな場面で起きるステージのものを説明するということだと思います。

そういう意味では、ここ5年は小学校のカリキュラム・マネジメントや、大学のガバナンス、そういったものを中心に研究をしています。個人を研究するんですけど、どちらかというと学習研究は、個人ではなくて、どちらかというと集団をクラスター化して、ある程度タイプ化して見ていくということになります。そして、ここだけでは駄目だよっていうことなんですけど、1990年ぐらいからか、ずっと、このカリキュラム・マネジメントや探究ということをやっていたので、私も関西にいた時期が長いということで、一番長いのがこの兵庫県の加古川東高等学校というところですね。ここに10年ぐらいずっとフィールドワークに行っています。あと徳島県立城北高校もそうですね。そういう意味では、ある意味、ずっと長く学生たちを追っていくと。こんなことをしています。

私ができることなんですけれども、ちょっと面白いデータがあって、加古川東高等学校を卒業した100人ぐらいにアンケート調査を行いました。今、みんな、大学1年生とか浪人とかしている方なんですけど。高校の学びって役に立った？っていうふうに聞いています。役に立った、役に立たない、いろいろあるんですけど、インタビュー調査をずっとしていくと、立命館大学に進学した人文系の学生さんがおられまして、面白いことを言っておられました。高校の教科教育は何にも役に立っていませんと。でも、探究でやったこと、この加古川東はいわゆる教科教育中心から探究中心に、20年前ぐらいから切り替えているのですけれども、そこでやったことは、今、大学でやっている学びと非常に親和性が高いですみたいな話がありました。残念ですけど、その研究も、私が学長職になったときに関東に出てきてしまったので、そのままになっていますけど、でもこんな研究をしておりました。

2つのジリツ

2つのジリツがあるだろうというふうに思っています。自分で立つほうですね。あとは自分を律するほうと。上のほうはインディペンデントとかリライアントということで、他に頼らず独り立ちすることということなんです。私が実感的ですけども、いわゆる進学高校のトップにいる生徒たちは、大体この1番。先生の影響をほとんど受けないです。自分自身で勉強できるので。でも2番、これはオートノミーのほうなんですけれども、定められたルールに従って行動することができるということ。この二つは、違うんですけども、合わせると、そういうことは自ら定めたルールに従って自ら行動するということが、両方のジリツをカバーする定義なのかなというふうに考えているということです。

2つのジリツ

1. 自立 independent, self-reliant

他に頼らず独り立ちすること

2. 自律 autonomy

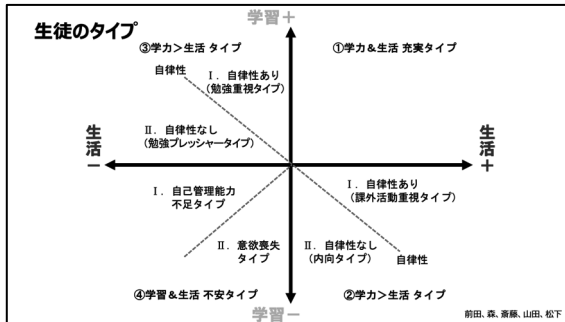
定められたルールに従って行動すること

ということは....

自ら定めたルールに従って自ら行動する！

これは、実は高槻中高等学校も6年ぐらい京都大学の松下先生と一緒にフィールドワークをしていたときに、生徒たちをタイプ別に分けましょうという話になりました。どういう軸があるのかなといったときに、まず学習面の軸がありますよね。これ、偏差値とか成績がいいとかいいうことではなくて、学習、頑張る、頑張れない、こういう軸がある。ここの先生がおっしゃるには、生活の軸もありますと。これで4象限ができます。でも、この1番のところは、さっきお話ししました、両方のジリツがかなう生徒さんたちが入る。でも、なんかこの四つのタイプじゃ片手間じゃないかなという話でずっと議論しながら、一体、何が重要って現場の先生は思っているのかなと思ったら、この自律という、自律性、赤いところですね。この軸が必要であろうということで、この高槻中高等学校のものも、実は校長先生が代わられてから、いろいろと違う形になってしまったので、これも中途半端になってしまったんですけども、

私たちの研究においては、7 タイプに生徒たちを分けて、その子たちがどういう特性があるのかということを調べるというところの準備ができたところで終わってしまいました。ただ、この考え方

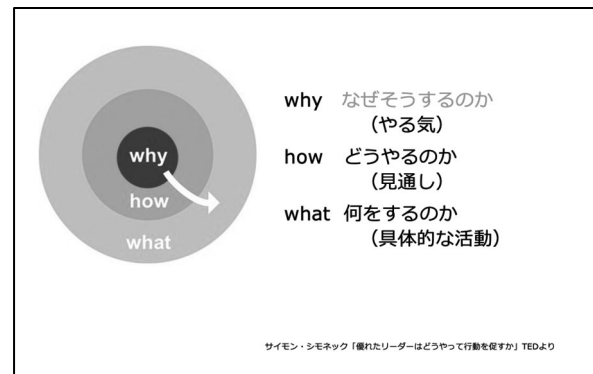


というのは、私も、今、じっくり来ている。ぜひ、きょう来られている先生がたの中で、これ、面白いよねと思ってみたら、ぜひこれで研究してみただけいたらというふうに思ったりもします。それぐらい、実は自律性っていうこと、つまり自分で考えるという、そういう主体性の話ではなくて、結局、自分でPDCAを回せるかどうかというのはすごく重要な観点だというふうに私は思っています。

学校って何のために行くの？って。私、小学校の校長先生ですけど、私、モリリンって呼ばれているんですけど。モリリン、なんで学校、行くの？って聞かれたときに、みんなが教えられなくても学べるようになるためだよっていうふうに、私はお答えしています。これ、私もそう思っているんですけども、この言葉を公言しているのは、関西大学の黒上晴夫先生ですね。シンキングツールで有名な方ですけども、私も本当にそう思っています。ですので、教えて学ぶ、教えて学ぶっていうことをずっと繰り返していたら、これ、教えるがなくなったら学べなくなっちゃうじゃないかという不安がすごく大きいですよ。学んでから教える、学んでから教えるっていうふうに変えたい。これ、学習研究者は、多分、みんな言っていると思います。そのときにすごく重要なのは、これ、サイモン・シモネックという経済学者が言っているんですが、why、how、what という形で、こういうふうに円心が大きくなっていくときに、why が本当に重要なんだと。そしてどうやるのかとか、何をするのかってところが、皆さん、どうし

ても気になる場所だと思うんですけども、なぜそれをしなければならないかというところをご理解いただくことが重要なのかなというふうに思っています。

私は今4年半、校長を務めているんですけども、小学校の改革したところ、すごく大きく変わりました。お行儀中心だったところから、いわゆる探究中心、主体的な学び中心ということに、そんな4年で変わるんですかって話だったんですけど、小学校の先生がたに、なぜそれをしなければ



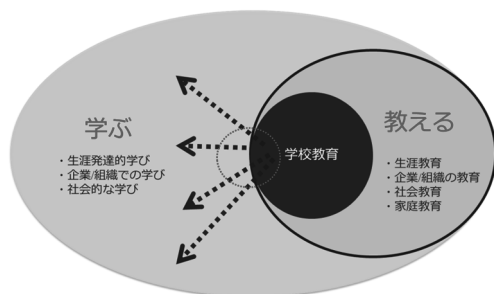
ならないのかっていうことを徹底的にお話します。私、専門家ではないので、初等の、how とか what のところは、あまりよく分からない。でも、なぜこれをしなければならないのかということをお話を先生がたにお伝えしたら、how、what は、そのプロフェッショナルな先生がたが考えられるんですね。ですから、徹底的に「なぜ」のお話をさせていただきました。ですので、きょうも、なぜ自律的がいいのかというところについてお話をしたいというふうに思います。

学習研究とは

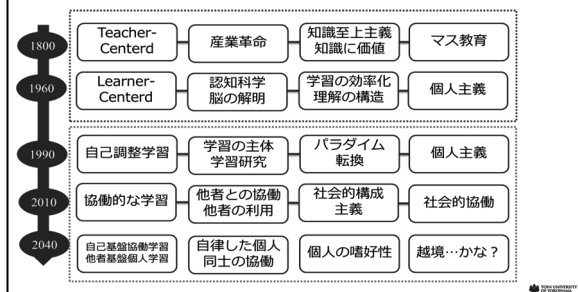
それには、学習研究の話、ちょっと早足ですけどさせていただきます。先ほど、お話ししましたように、教育の話と学びの話ってというのは、表裏一体になっています。先生がたのいろいろな施策のチャレンジは、全部、子どもたちの学びのところに返ってくるということになりますね。表裏一体ですので、私たちの研究成果を先生がたに還元すれば、先生がたが、先ほどの how とか what のところを考えてくれるというシステムになっています。そしてもっと言えば、「学ぶ」の概念のほうが全然

大きい。もう一度言いますが、教えて学ぶということを繰り返してこれを習慣化したときに、大学、出たら一気に学ばなくなるのが日本の学習者の特徴ですね。今、私どもも大学教育の世界で、リカレント、つまり社会人になってから学ぶということについて、ずっと議論していますけど、日本の場合にはなかなかそこがうまくいかない。ということであれば、学校までで学ぶのが嫌になっていますという方がたくさんいる。または、学校で学ぶということの価値が、もしかしたら十分に認識されていないのかもしれない。

教えると学ぶの関係



学習の系譜



そういう意味で、これ、お勉強の部分なんですけれども、私が学習の系譜っていうのをざって作ってみました。簡単に申しあげますと、昔は teacher-centered です。産業革命の時代なので、いち早く技術を幅広く伝えるということであれば、先生が教えるほうが早かった時代がありました。その後に、私たちの研究とすれば認知科学とか、あとは脳科学、始まってまいりましたので、どうやったら効率よく学ぶことができるのかなということで、learner-centered という言葉が出てきたということになります。そしてその後、自分を調整する自己調整学習というのが 1990 年代から出てきています。今日の自律の話は、主にここにも

通じるところで、学習者が主体でありますよということなので、learner-centered って書いてありますが、実際にはこの teacher-centered から student-centered、learner-centered ということに変わってくる中で、自己調整学習が出てきているということです。

ここから、いわゆる学びの共同体論が出てきたりするんですよね。社会的構成主義というふうに呼ばれたりしていますが、これからあるのは多分、自律した個人同士の協働が必要と。つまり、グループで活動するのではなくて、チームで活動できるようになる。このグループとチームっていうのは、パッと見た形態は似ていますが、実はそこには大きな理念の違いがあるってことです。チームは自律した個人が、それぞれの良さを持ちながら、違う専門性を持っている中で、お互いにそのコミュニティを発展させるような、こんなイメージがあります。そのために、これは私、勝手に言っているんですけど、自己を基盤とした協働学習、あとは他者を利用するような個人学習、こういったようなものが今後、出てくるのかなと思います。そのときに、キャッチフレーズとなるのは、私は越境学習かなというふうに考えているということですね。学習研究の大きな流れの話をさせていただきました。

学習が促進する条件っていうのは、ある程度、分かっているんです。これ、学習研究の結果で。これは私の研究も含めて学習研究者の知見をザッとまとめたものなんですけど、1 番から 8 番まであります。そして 1 番のところですね。1、2、3、これはどちらかというと個人の学習のスタイルの話になります。アクティブ・ラーニングとか、

(森の) 学習が促進する条件

1. 「なぜ」から始まる学習（主体性）
2. いろいろな他者によって解答にバリエーションがある（吟味）
3. 自らの理解と他者の理解の間に葛藤や躊躇がある（ゆらぎ、批判的思考力）
4. 自らの学習状況を俯瞰できる（メタ認知）
5. 自己肯定感を上げる（情意面の補強）
6. 学習に一定の時間をかける（学習時間の確保）
7. 文脈があり、知識ネットワークが築ける（カリキュラム）
8. 個々の受講者にフィット感がある問い（個別最適）

三宅(1997)、Brown(2000)、Wiggins&Mc Tighe(2005)、Sauer(2006)など学習/学習化学系の知見とフィールドワークでの実感を私見としてまとめたもの

あとは主体的・対話的で深い学びとかいわれているものはこういうものに関連するものだと思います

す。そして4、5、6に関しては、これは自分自身の学びの話ですね。そして最後7、8、これが教育環境の話。なので、実は教育環境って7番、8番、やれることって意外と少ないけれども、ここはこういったようなことも含んでいくということが、新しい教育の形なのではないかということですね。ですから、例えば自律学習に非常に重要な、自らの学習状況を俯瞰できると。これ、俯瞰しなさいねって言って俯瞰できるものではないんです。どうしたら俯瞰ができるのかということだったり、俯瞰することで何ができるのかということをしつかりと学習者に理解させたりすることが重要っていうことになりますので、直接的にこれを身に付けるというよりも、これが身に付くような環境を整えるということになるかなというふうに思います。

新しい時代

これを全部、授業の中に放り込んだり、カリキュラムの中に放り込んだりっていうことは難しいかもしれません。でも、この授業はここが担当、この授業はここが担当ということで、これが組み合わせるといことであれば、私はやっぱり重要なのはカリキュラム・マネジメントだと、いつも思っています。

ここからもう少し大きな話をさせてください。なぜ、今、自律性が重要なのかというと、ズバリ時代が大きく変わったからということ以外に理由はないというふうに思っています。私は変わったということ、VUCAという言葉で説明をしていますね。変動性、不確実性、複雑性、曖昧性かな、これの頭文字を取って VUCA というふうになっている。ですので、先生がたが、今の大学院のかたがたであっても、受けた教育と、今は大きく変わらなければならないということになりますね。ここにありますように、きょうの非常識が明日の常識になったりとか、世の中の職業が大きく変わったりします。ちなみにこの中で、ChatGTP とかをよく使われている方ってどのぐらいいますか。ありがとうございます。1割いるかいらないかな。ぜひ使ってください。それがスタンダードになる

からです。使わないと、こちらが怖くなってしまいうので、使う人に脅威を覚えてしまう。これが人間の心理ですね。ぜひ使っていただいて、一体何ができて何ができないのかということを実体験していただく必要があるかなというふうに思います。

そういう意味で文科省のほうも、もう AI に代替可能性が高い職業とか低い職業とか、こういったようなものを資料として出している。これも AI で導き出しているの、どういうアルゴリズムがあるかということは、ぜひ見ていただきたいと思います。うんですが、これ、子どもたちに見せると、一個一個、この職業がっていうんですけど、そうじゃないと。一番上に書いてあるんですけど、結局、データ分析とか秩序性あるものは AI のほうが得意なの。だから、今、私、すごく心配なのは、データサイエンスとか、みんな、重要だよっていうふうに言っていて、新しい学部もどんどんできていますけど、それこそ、ああいったようなものは AI のほうが得意なので、そのうち、「OK、Google、〇〇のプログラミング、書いて」って言ったならもうすぐ書いてくれると。重要なのは、それを見ながら、どこが自分にとってカスタマイズしなければならないところかを探してカスタマイズしていくってということなので、そういう意味で、どうなのかな、データサイエンスっていうところも、しっかりそういうところを押さえていかなければならないかなというふうに思います。

でも、「一方、芸術・歴史学・考古学・・・」と示してある二つ目のところなんですけど、こういったようなものは取って替わられませんというふうになっています。例えば抽象度が高いもの。二つ目はネゴシエーションが必要なこと。こういったようなものは AI ではできません。そういったようなときに、一体、私たちはどこに向かって子どもたちを導くのかということは、すごく大きな問題になってくるかなというふうには思います。

三菱総研の資料には、将来的にはこういう世の中が来るよね、一家に1台、必ずロボットがいたりとか、あとは地方であっても都会であっても、全てバーチャルな世界でつながるので、そういう意味では格差がなくなったりとか描かれています（「未来社会構想 2050」）。あとは、今、英語を一

人工知能やロボット等による代替可能性が高い/低い100種の職業

- 必ずしも特別な知識・スキルが求められない職業に加え、データの分析や秩序的・体系的な操作が求められる職業については、人工知能等で代替できる可能性が高い傾向。
- 一方、芸術・歴史学・考古学、哲学・神学など抽象的な概念を整理・創出するための知識が要求される職業、他者との協調や、他者の理解、説得、ネゴシエーション、サービス志向性が求められる職業は、人工知能等での代替は難しい傾向。

代替可能性が高い職業

IC生産オペレーター	ゴム製品成形工(タイヤ成形を除く)	電気通信技術者
一般事務員	こん包工	電算写植オペレーター
鋳造工	サッシ工	電子計算機保守員(IT保守員)
医療事務員	産業廃棄物収集運搬作業員	電子部品製造工
受付係	紙器製造工	電卓運転士
AV・通信機器組立・修理工	自動車組立工	道路バトロール隊員
駅務員	自動車塗装工	日用品修理ショップ店員
NO研削盤工	出荷・発送係員	バイク便配達員
NC旋盤工	じんかい収集作業員	発電員
会計監査係員	人事係事務員	非破壊検査員
加工紙製造工	新聞配達員	ビル施設管理技術者
貸付係事務員	診療情報管理士	物品購買事務員
学校事務員	水産わね製品製造工	プラスチック製品成形工
カメラ組立工	スーパー店員	プロセス製版オペレーター
機械木工	生産現場事務員	ボイラーオペレーター
寄宿舎・寮・マンション管理人	製パン工	貿易事務員
CADオペレーター	製本作業員	保管・管理係員
給食調理人	清涼飲料ルートセールス員	包装作業員
教育・研修事務員	石油精製オペレーター	保安・管理係員
行政事務員(国)	セメント生産オペレーター	ホテル客室係
行政事務員(県市町村)	繊維製品検査工	マシンニングセンター・オペレーター
銀行窓口係	倉庫作業員	ミン縫製工
金属加工・金属製品検査工	惣菜製造工	めっき工
金属研磨工	測量士	めん類製造工
金属材料製造検査工	宝くじ販売人	郵便外務員
金属熱処理工	タクシー運転者	郵便事務員
金属プレス工	宅配便配達員	有料道路料金収受員
クリーニング取次店員	鍛造工	レジ係
計器組立工	駐車場管理人	列車清掃員
警備員	通関士	レンタカー営業所員
経理事務員	通信販売受付事務員	路線バス運転者
検収・検品係員	積卸作業員	
検針員	データ入力係	
建設作業員		

代替可能性が低い職業

アートディレクター	歯科医師	日本語教師
アウトドアインストラクター	児童厚生員	ネイル・アーティスト
アナウンサー	シナリオライター	バーテンダー
アロマセラピスト	社会学研究者	俳優
犬訓練士	社会教育主事	はり師・きゅう師
医療ソーシャルワーカー	社会福祉施設介護職員	美容師
インテリコディネーター	社会福祉施設指導員	評論家
インテリアデザイナー	獣医師	ファッションデザイナー
映画カメラマン	柔道整復師	フードコーディネーター
映画監督	ジュエリーデザイナー	舞台演出家
エコノミスト	小学校教育員	舞台美術家
音楽教室講師	商業カメラマン	フラワーデザイナー
学芸員	小児科医	フリーライター
学校カウンセラー	商品開発部員	プロデューサー
観光バスガイド	助産師	ベンション経営者
教育カウンセラー	心理学研究者	保育士
クラシック演奏家	人類学者	放送記者
グラフィックデザイナー	スタイリスト	放送ディレクター
ケアマネージャー	スポーツインストラクター	報道カメラマン
経営コンサルタント	スポーツライター	事務教官
芸能マネージャー	声楽家	マーケティング・リサーチャー
ゲームクリエイター	精神科医	マンガ家
外科医	ソムリエ	ミュージシャン
言語聴覚士	大学・短期大学教員	メイクアップアーティスト
工業デザイナー	中学校教員	盲・ろう・養護学校教員
広告ディレクター	中小企業診断士	幼稚園教員
国際協力専門家	ツアーコンダクター	理学療法士
コピーライター	ディスクジョッキー	料理研究家
作業療法士	ディスプレイデザイナー	旅行会社カウンター係
作曲家	デスク	レコードプロデューサー
雑誌編集者	テレビカメラマン	レスラン支配人
産業カウンセラー	テレビタレント	録音エンジニア
産婦人科医	図書館員	内科医

※50音順、並びは代替可能性確率とは無関係

職業名は、労働政策研究・研修機構「職務構造に関する研究」に対応

-2- 【出典】2015年12月2日株式会社野村総合研究所News Releaseを元に文部科学省作成

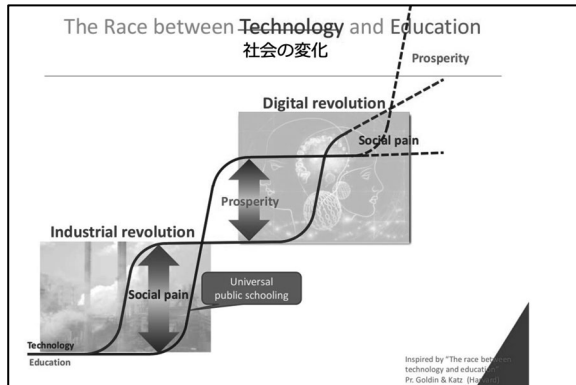
引用：文部科学省（2017）「高等教育の将来構想に関する参考資料」

生懸命やりますけど、もう翻訳機器があるので、英語を学ぶではなくて、英語で何を学ぶのかが重要だったり。こういうことで、概念はどんどん変わっていくということだと思います。

そんな世界が来るの？と思われるかもしれませんが、例えば10年前に、今、皆さんが持っているスマートフォンの普及率って、どのぐらいか分かりますか。〇〇さん、分かりますか。適当に言ってみてください。10年前。惜しい。いいところ、いっています。たった10年前ですよ。10パーセントちょっと。えーっと思いませんか。だから10人いたら1人ぐらいしか、こんな大きな、「しもしも」というようなあんな大きなものを持っていたってということなんですね。ですから、今、もうスマホがないと生きていけないじゃないですか。同じように、あるときに一気にAIロボットが入ってきて、家庭だけではなくて学校にも広がって、いつからか講義系の授業はプログラムで超有名なスーパーティーチャーが出てきて、もうノリノリで教えてくれるみたいな時代が、もうすぐ来るというふうに思います。

これからの日本の予想については、結構ネガティブなことたくさん書いています。ますます少子化になって、家族の在り方も変化すると。つまり、お父さんはお仕事をしてお母さんがおうちにいるという形から、2人ともダブルエンジンの時代がやってくるということになりますし、あと一番は重要、ここですね。転職が当たり前前の時代になってくると。そして今日のテーマでもある、自分自身のウェルビーイングを追求していく。こんな時代が重要だということになります。これはOECDから持ってきているものです。テクノロジーとエデュケーションのレースということなんですが、私は今日はこのテクノロジーのところを社会の変化というふうにさせていただいています。ということは、社会の変化のほうが進んでいく。社会の変化が速くて、学校教育がそれに追いついていかないと、この格差、大きくなる。これ、social pain、社会的な痛みだと思います。ここが非常に重要。今はこの時代が来てるの。そういう意味では、各学校が、社会がどういうふうに変化するかということを一いち早くキャッチアップして、そ

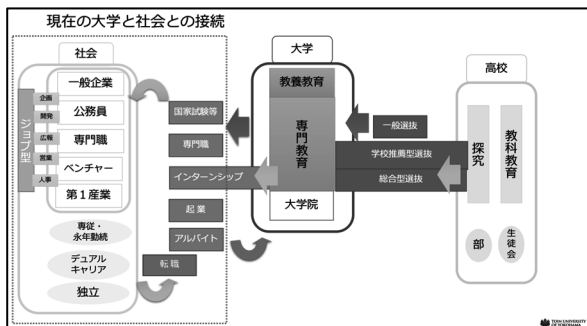
してカリキュラムをどんどん変えていかなければいけない時代というふうに思っています。



これがようやくできると、今度は、いわゆる教育のほう優勢になってきますので、そこがいわゆる社会的な発展を迎えるという時代なんですけれども、またそうすると、社会の変化、テクノロジーだけではなくていろんな社会の変化がワーストとなると。このレースがずっと、産業革命以降、起きているということになります。ここの social pain を埋めるというところは、先生がたが勝手に変えるということではなくて、学習者が自律的に、情報さえ与えれば、じゃあ今、これ、やったらいいよねっていうほうが、絶対にいいですね。そういう意味では自律性ということも非常に重要だということだと思います。

新しい働き方

もう一つ。今日、自律の話じゃないの？と言われるんですけど、ここが分からないと、なかなか



why のところが出てこないかなと思うんだけど、働き方もこんな形になっていますね。今までは、教科教育が中心になっていて、知識で大学とつながっていました。そして大学からも一括採用で、

そして専門職、一般職みたいなことになる。でも重要だったのは、永年勤続可能だったです。でも、今、ちょうど8時から10時のゴールデンタイムのところって、転職サイトのCMばかり出てるの、ご存じでしたか。そうなんです。今はこういう形になっています。例えば、高校から大学も、学校推薦とか総合型といったような形で、いわゆる選抜がなかなかない形で接続したりとか、あとは大学と社会も、どちらかというところ三者合意という形になっていて、そこもいわゆる選抜がもうなくて、接続の時代になっている。ということであれば、下手したら、高校から社会まで、選抜ではなくて接続の時代がやってくるということになります。そしてこちらもういきなり起業する人もいれば、ちょっと勤めてすぐに起業する人もいるということになっていますし、こちらメンバーシップ型からジョブ型に変わるということになっていて、永年勤続というものが、もうもたなくなっている。となったときに重要なのは、転職できるかどうかなんです。

ここで、教えてから学ぶ、教えて学ぶをずっとやってきた人は、転職できないということになりますね。転職をすれば必要な知識がまた変わってきますので、場合によっては先ほどのリカレントのような形で、大学院や大学に戻って、また新しい知識、またはデュアルをやる。こんなこともあり得る。そしてもっと言えば、デュアルキャリア、トリプルキャリアのような形で、月曜日から木曜日までは働くけれども、金曜日、土曜日は、自分がこれまでやってきたサッカーを使って、子どもたちにサッカー教室をNPOで立ち上げてやる。こんなことも重要なわけです。

ですから昔みたいに、本当に一直線で、あそこに向かってみんな行こうということから、さまざまなウェルビーイングの在り方があって、複線型キャリアが重要になってくると。そういう意味では、あなた、どういうふうに生きていきたいですか、あなた、何したいですかといったようなものは、全部、自律的なキャリアになるということになります。

そういう意味では、働き手の意識の変化ということで、こちら側がいわゆる高度成長期、あちら

側が VUCA の時代ということで、こんな違いがありますよということですね。これが非常に大きなジェネレーションギャップがあって、今でも例えば高校とか中学校の先生がたで、40 代以上のかたがたは、こちらの概念を引きずっています。でも、Z 世代の先生がた、もういますよね、23 歳、24 歳は、あちら側が何となく分かる。そういう意味で、私はますますカリキュラム・マネジメント、個人の先生が自分が思うように授業するという時代から、しっかりと学校で方向性を決めて、それをカリキュラムに落とし込むといったようなことが重要なのかなというふうに思います。

ちなみに、圧倒的な人材不足です。大手企業も中小企業も含めて、今、採りたい働き手の 7 割しか採れてないというふうにいわれていますね。でも、この人たち、働き手っていうんですけど、私はただただ、企業の都合のいいように働く働き手ではなくて、「人材、つまり自分自身のキャリアも、そして社会貢献も含めて人材ということがいわれる。そういう意味では、学校教育の役割っていうのは非常に大きいのかなというふうに思いますね。

現代の賢さとは何か

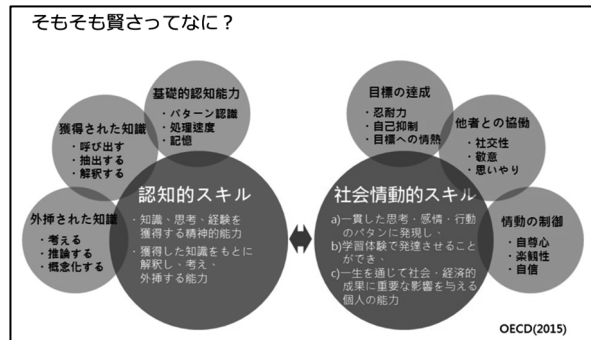
どのような職業も必要なのはリサーチ、自分で調べて、デベロップメント、試行錯誤して、そして足りない知識を学び続ける力。そして、それらの力を自分自身のプラスだけではなくて、社会の



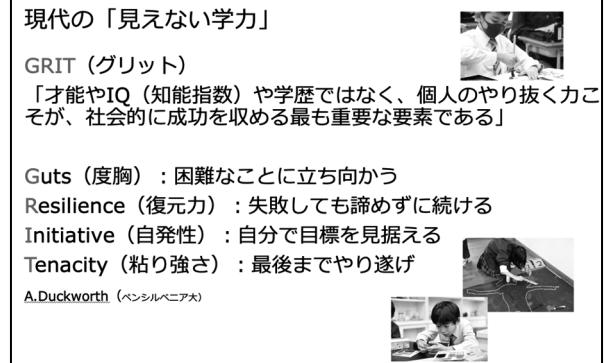
改革を実現していく力、こういったようなものが必要だというふうに思っています。これってやっぱりオートノミーが自律にないといけないというふうに考えています。賢さとは何かというところなんですけど、これも OECD から持ってきたもので、赤い玉、青い玉がありますよね。今、言っ

ていた自律性とかは全部、この社会情動的スキルのほうに含まれるのかなというふうに思っています。こちら側が偏差値で出てくるような力。そしてこちら側が、今は日本の場合は、多く、部活動で支えられているような力かなというふうにも思ったりします。

この目標の達成、そのために一体何をしたらいい



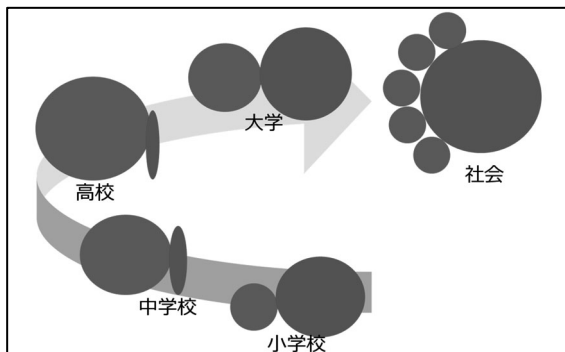
いのか。手段とかそういうものに関しては、やはりオートノミーの話だと思いますので、この赤い玉が非常に重要だということですね。今、赤い玉の中でもよく言われているのが、この GRIT です。ペンシルバニア大学のダックワースさんが言っているんですが、いろいろと調査した結果、今、社会で成功している人が持っている力はこの GRIT、いわゆる、やり抜く力というふうにいわれています。でも、ただがむしゃらにやるわけではなくて、自己調整学習の話なんですよ。何をしなければならぬのか、そして目標を決めたら手段も自分で決めて、そして最後までそれをやり抜くということだと思います。



そして兵庫教育大学のホームページに掲載されている図ですが、これが自己調整学習です。自分で目標を設定して、そのためにはいろいろな動機付けもありますね。そして自分で方法を決めて、そして実際にやってみたものを、自分で内省する

と。こんなような形でございます。そして先ほどのやり抜く力っていうのは、こんな感じかなと実は思っています。小学校のときって、結構そういうことを意識しています。先ほどの赤い玉ですね。単なるコミュニケーション能力ではなくて、人に親切にしたりとかする力。それは全部、赤い玉の話なので、バランス的にはこんな感じだと思います。でも、学習指導要領が始まって、いくらその中に、社会情動的スキルや非認知能力のものが含まれていたとしても、やっぱり教育内容として青い玉のところのところがしっかりと決まっていますので、どうしても中高はこの形になります。でも実は大学に入ったら、また逆転傾向にあって、大学から社会への接続になりますと、知識はその都度必要なものが変わるけれども、それを一から自分で学べるといったようなことが必要。なぜかという、もう誰も教えてくれないからです。ですので、本ですとかインターネットとか、ああいうところにいっぱい素材がありますので、そういったようなもので、自分一人で学習していくことが重要っていうことですね。

その赤い玉みたいなもの、自律性っていうのは、どういうところで育つのかというところなんです。これ、実は、何か研究結果があるわけではありません。私がこんな感じだろうというということで、勝手にまとめさせていただきました。こういう環境があれば、先ほどの赤い玉が身に付きやすくなるだろうというふうに私は実感をしているということですね。その中に、自分で自己調整学習で、

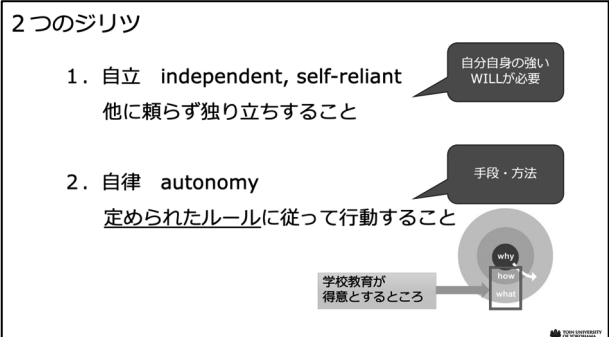


こういうことをグルグル回していくことが必要。そして、自分一人ではできないことってたくさんありますので、そういう意味ではチームで働くことが重要なので、仲間と仲良くなるわけではなくて、

意見をぶつけ合って最適解を見つけていく。こういうことが必要だと思います。自己調整学習って、何となく自分一人の話だよというふうに思われるかもしれませんが、先ほど系譜でお見せしたように、自律した自分が、自分に何が足りないかをしっかりと判断して、足りない部分を他者の知識や他者の力で埋めていく。こういうような発想が非常に重要ということであれば、自律した個人が協働的に学ぶということが発想になってくるのかなというふうに思います。

自己調整学習

自己調整学習の話でございます。先ほどのところに、こんな形で付けてみました。1 番目、これは自分自身のすごい強いウィル (will) が必要です。つまり動機付けが必要なんです。自己調整学習っていうのは、そもそも動機付けも入っているので、自分がやりたいと思っていることの PDCA を回すようなイメージですね。でも、先生がた、ご存じのように、今の子どもたち、生徒も含めて、自分が何をしたいのか、ほとんど分からない。よくある探究活動で、何してもいいよって言っても問いが浮かばないっていうのは、ここだと思います。そうだと思います。なぜかという、それを許可してないから。自分で考えていいよ、自分で何してもいいよっていう許可が、子どものときからできてるかと言われれば、日本の場合には、そこがまだまだ弱いところかなというふうにも思っています。



でも 2 番のところ、オートノミーのところ、これは手段なんです。方法なんです。この手段と方法っていうところは、ここにもお示ししてありますけど、この how とか what のところですね。

ここって、学校教育が得意とするところなんですね。なので、これ、定められたルールに従って行動することということをトレーニングしていく必要があるというふうに、私は考えています。こっちのオートノミーは、これは動機付けの話なので、動機付けで、さあ、あなた、これをやろうと思ってみなさいとかはできないんですよ。だけれども2番目のこっちは、あなたが達成しなければいけないのはこれです。これに向かって自分自身で計画を立てて、そのとおりにやってみなさいということとはできます。

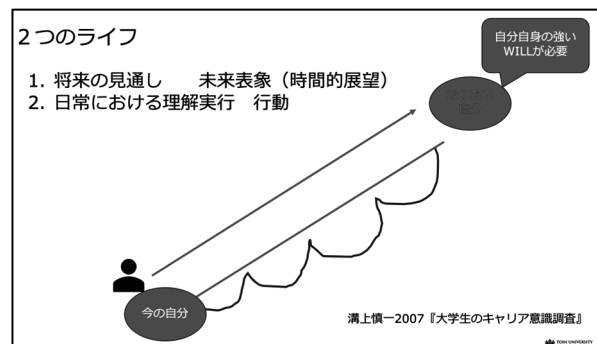
ということで、何となくイメージなんですけど、この両方が必要なのは確かなんです。でも今まで学習指導要領では、自律の話がすごく強かった。だけど、ようやく探究が義務化されたことで、自立もできる。ですので、ちょうど、今の学習指導要領は、バランスよく、こっちの自立もこっちの自律もカバーできてるというふうに思っています。となれば、探究は当然ながら、この自分自身の強いウィルが必要という形で設計していただきたい。よく、先生がたがテーマを与えてしまう。例えば、これのほうで総合型入試のときにうまく使えるから。これでは駄目です。自分がやりたいと思ってること。それでない方向で、教科教育のほうは、全てが自律的なところを意識するわけにはいかないかもしれませんけれども、こちらの探究、またはホップ・ステップ・ジャンプのところの発展的な問題のときには、こういったようなところを、ぜひ意識していただいてもいいのかなと思います。

もう少し詳しくお話をいたしますね。先ほどの兵庫教育大学の資料で考えれば、こちらは動機付けが必要な。ちなみに、今日はお話しいたしませんけれども、この動機付けのところを、教育学だとしても内発的な動機付けてことになるかもしれませんが、これが例えば社会的動機の達成動機とか親和動機とかでも全然いいわけですね。競争的動機でも全然OKです。例えば部活動で考えると簡単で、ここの動機付けのところに、競争的動機付けを入れます。つまり、全国大会がある、地区大会がある、どこの学校には負けたくないよねというところから目標が立ちます。そうしたら、自分たちでトレーニングを考えて、やって、試合

に臨むと。その後に、なんで負けちゃったのかなというところを振り返って、次のステージに行く。これ、非常に分かりやすいですね。そして生徒たちもこれだと非常にやりやすいと思います。

こういったようなタームを、授業の中にも持ち込んで、そして例えば中学校であれば、1年、2年、3年と、どう高度化していくのか。そして私学の場合では、その上にさらに高校が乗っかっていますので、6年間でどうデザインしていくのか。こういうことができるのかなというふうに思います。そういう意味では、強いウィルが必要、または、ここに先生が、先ほどのオートノミーのほうは、指示をしてしまいます。そのときに、ある人はフォアキャストで考える。でもこれって行き当たりばったりなんですよ。でも、自律的な学習者はバックキャストで考える。ここが実現したい未来、これが自分のウィルであっても、先生がくれたお題であっても、ここなので、じゃあこういうふうにやったらいいよねという手段と計画を立てていく。こういうことが重要だということですよ。

同じように、本学の理事長の溝上が、二つのライフという話をしていますね。こちらも一緒に、ここ、ここ、ここという形でやっていくよりも、遠いなりたい自分というものを見つけて、そこからバックキャストで考えていくことが重要。ですので、ここがないと、自分自身の強いウィルができないというふうに、溝上は言っています。でも私は、やっぱりここがみんなが持っているものっていうのは、なかなか難しいんですよ。でも、先ほどのように、ちょっと戻しますけれども、こ



こが先生が与えた問いでも、私は十分に訓練としては有効だというふうに考えます。数学で、こういうことをしてごらん。そこまでの解はみんなに任せるよ。そこまでの手段はみんなに任せるよと

いったようなことを、多分、先生がた、やられていると思います。ただそれが、お一人の生でやられていると、それが継続性がないので、ぜひ、その辺りをカリキュラムでカバーできないのかなっていうことですね。

重要なのは、すごく小さくてもいいんですけど、例えばウェルビーイングの観点からすれば、なりたい自分をどのようにつくるのか、そしてやりたいことをどのようにつくるのかということだと思います。これだと先ほどの立つほうの自立に近い形ですね。でも、これでなくても、先生がたの問いとしても、非常にオートノミーのほうは訓練はできるというふうに思っています。

重要なのは小さくても...

「なりたい自分」をどのように作るのか
「やりたいこと」をどのように作るのか

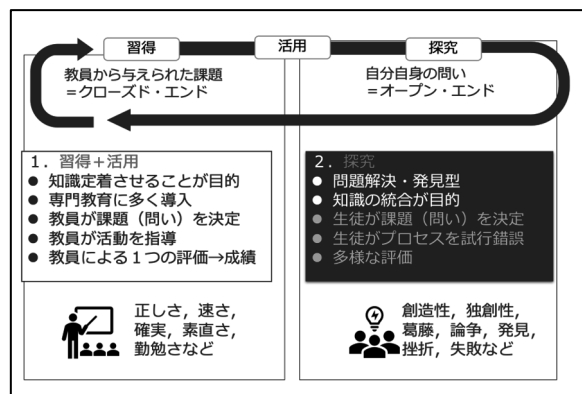
大学の話で恐縮なんですけども、例えば学部、学科を選ぶのって超難関で、自分が何になりたいのか、何をしたいのかということを実現化して選んでいかなければいけないということになりますよね。入ってから考えようねっていうことは、転学部っていうことは、ほとんど容易じゃないっていうことは、皆さん、ご存じだと思います。そして、なぜこんな話をするのかっていうことですが、実は、多くの学生たちが、学びを途中でやめているという現状があります。これ、あまりソースとしては信用性がない調査なので、イメージとして思ってくださいと、大学がもし100人の村だったらということで、私たちが思っているような形でキャリアを着々と築いていく人たちは、大体3分の1ぐらいと。残りの3分の2といったところは、いろんなところで立ち止まっている。その理由としましては、大体、こういうことですよ。専門性のミスマッチ、あとは大学の学びのスタイルになじまないということ。これは2番目に関しては、大学ってどうしてもオートノミーのところが多くなってきたり、先ほどのインディペンデンスのところが強くなってきたりするので、

教えてから学ぶということをやずっと繰り返してきたときに、大学のところで非常に大きなギャップが生じているところだというふうに思います。

探究学習と自己調整学習

先ほどお話ししましたように、自己調整と探究学習なんですけど、学びは、ホップ・ステップ・ジャンプでできていますね。習得・活用・探究のところだと思います。それ、私がこんな感じで分けて。何となく、習得・活用がいいとか、探究がいいとか、そういう話ではなくて、そもそも学びはこういうふうにできていて、学習指導要領をそのまま忠実にやっていけば、ホップ・ステップ・ジャンプでできるということになりますね。

習得・活用のほうでは先ほどお話ししましたように、答えがあるものが多い。または既にこれを身に付けさせたいと思っているものが多い。こういった場合には、ぜひオートノミーの考え方を利用していただきまして、方法、手段ということで、ぜひ、工夫をいただきたいというふうに思っています。簡単に言えば、何したらいいのかというhowとかwhatとかの部分なんですけど、この後、出てきますが、そこを私は先生がたにぜひお任せ



したい。なぜかというと、先生がたのほうがプロフェッショナルなので。でも、簡単に言えば、答えはこうです。答えはもう分かっています。じゃあ、なぜこうなるかを、みんなで考えてくださいという形でも、十分にオートノミーというものは達成できる。あと、オートノミーの工夫としましては、その場ではなくて、少し期間があるものが

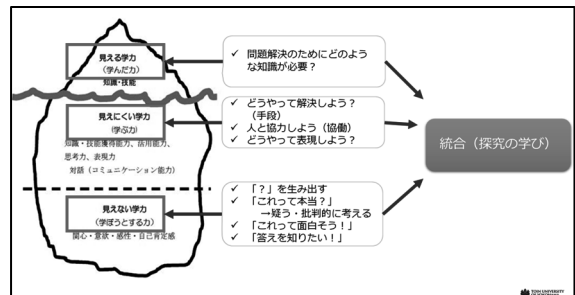
いいというふうにもいわれています。例えば1週間とか。1週間でこの問題を解決してくださいみたいな問いの出し方っていうのは、非常にこちらのほうに適しているというふうに思っています。そして逆に、探究のほうは、オープンエンドの問いになると、自分自身のウィルが非常に重要になってきますので、少し陳腐であっても、自分自身が知りたいと思っていることを、失敗してもいいから取り組むということが非常に重要になってくるのかな。ですので、こっちはインディペンデンスのほう、こっちはオートノミーのほう。こういう形で、繰り返しになりますけれども、全ての教科のところで工夫をされると、教えてから学ぶという型から、学んでから教えるという形に転換していくのかなというふうに思います。

実は私、反転授業の研究をずっとしてきました。なぜかという、あれって学んでから教えるの形になっているからなんです。日本の学生はうまくいかないんですけど、でも実は反転授業っていうのは、お話ししたように、動画は提供されているんですけども、それをいつ学ぶとか、どう学ぶかというのは、学習者に任されている案件なんですよね。その後に、例えば、自分で学んできたことを、授業でしっかり先生が教えてくれると。このほうが、全然、知識の定着率が高かったという研究があります。そういう意味で、学習者を、教えてから学ぶから、学んでから教えるに、どう変えていくか、ここが実は今後の人材育成の大きなチャンスのところなのかなというふうに思います。

あと探究は、こういったような形で、認知能力、非認知能力といったようなものを統合するということが非常に重要ですね。結局、知識って、使っていないとどんどん忘れてしまう中で、統合して使う。資質・能力と知識を分けていくわけではなくて、そこを統合して使うということであれば、非常に探究っていうのは重要なんですけれども、そのときに、こっちから、つまり非認知能力から、これって本当？とか、これってなぜなの？というところから始めることが、非常に重要だと私は思っています。それをどうやって解決しようかな、そのためにどういう知識が必要なのかなというこ

とを考えていく。

ですので、立つほうのインディペンデンスのほうと、オートノミーのほうと、一緒にすることで、探究というのは実は非常に効果がある。ということであれば、この探究のデザインは、ぜひ、効果が出るような形でデザインしていただきたいというふうに思っています。今、私も時々高校に入らせてもらって、修学旅行でこれこれ、調べなさいという形で、オートノミーっぽい形の探究になって、ちょっとこれは残念ですね。ぜひ自



分自身の why を創造するような形の探究が必要だと思います。

よく質問でいただくのは、といっても生徒たち、クエスチョンマーク、全然浮かばないんですよ、どうしたらいいんですか。いきなり、教えて学ぶ、教えて学ぶをずっとやっているの、さあ、今から自分のクエスチョン出しなさいなんて、これはできない。そういう意味では、本当に普段から、あなたたちはどう思うの、あなたたちは何を考えているのということを、先生がたが働きかけていたりとか、先ほどお話ししたように、オートノミーの訓練をしていくことによって、こういったものがおさらずやりやすいですね。具体的に何か方法はないですかと言われたら、今から3日間で、自分がなぜと思うことを100個挙げてください。こういったようなものが、非常に有効かなと思います。100個ってなかなか浮かばない。もう、電車に乗りながら、バスに乗りながら、ずっとスマホでYouTubeを見てるんじゃなくて、もう何かと思うものを全部挙げてくると。そういうものを、隣の人と見比べてみると、こんなこともあるのか、みたいなことがあります。そういうことを繰り返していかないと、探究のクエスチョンマークというのは浮かんでこない。もしかしたら、この後で、多分、問いの話も出てくると思います

けど、自分自身の問いを立てることにしても、訓練が必要だというふうに思っています。

主体的の第一歩ということで、最近、「親確」っていう言葉がよく聞かれますね。自分で決められないので、何でも親に確認をするということですね。絶対にトレーニングが必要になってきます。これ、うちの小学校なんですけれども、いろんなことを子どもたちに選ばせるということを徹底にやっています。でも、全く何もないところから選びなさいってことはできないので、その選択肢を絞るのは教員がしています。ですので、きょうの昼休み、ボール競技、ダンス、何とか、三つのうちのどれがいい？というふうにすれば選ぶことができます。でも、何でもいいから一緒に遊ぼうよという、たった 20 分しかない時間なのに、どんどん時間だけが過ぎていくということですね。

あとは、問題、どの問題からやってもいいよ。1 番からやらなくていいよ。なので、うちのテストって、1 番、2 番、3 番って振ってないです。どこからやってもいいよ。こういったような。ちょっとした工夫が、子どもたちを、自律性、主体性のところに結び付くのかなというふうに思いますね。

主体性の第 1 歩

自分で決める決断のトレーニング

幼年期＝二者択一から少しずつ選択数を増やす

⇒だからこそ長期的な働きかけが重要

カレーとハンバーグどっちにする？
半袖のシャツと長袖のシャツ、どっちを着る？
この 3 冊のどの本を読もうか？
どの問題から取り掛かって大丈夫だよ。

オヤカク...
「自分で決められない人間」に成長してしまう最大の要因は、子どものうちから「自分で自分のことを選択する」経験が圧倒的に少ないことが要因



あとは、疑問を持つトレーニングですね。なぜと思わなければ、先生が言ってることは 100 パーセント、いつも正しいと思っていたら駄目なわけです。ですので、うちの小学校も、今から先生、二つうそをつきます。それを見破ってくださいねと言って授業をしている。いつもではないですよ。いつもじゃないですけど、時々そんな形で授業をしている。どこが先生のうそだったか分かる？ということで、子どもたちが、あれじゃないの、これじゃないのって、うわーっと盛り上がっていつ

て、ちょっと隣の友達ともしゃべってみてみたいなこと。先生のうそはどこだ、みたいな。これ、大変盛り上がるので、お勧めをいたします。高校とかでも重要だと思います。先生、今、間違っ問題、解くから、どこが間違ってるのか見つけてみたいいな形ですよ。いつも先生が正しいことを言っているということではないと。先生も学習者なので、当然ながら間違えるし、そこを皆さんに指摘してほしいと思っているという、こういう関係性が重要なと思います。

主体性の 2 歩目

疑問を抱くトレーニング

限られた時間の中で疑問を複数出す
批判的思考力を日常化する

⇒教師と学習者が対等な関係
⇒だからこそ長期的な働きかけが重要

どうして砂糖は甘い？
コンタクトレンズを液状にして点眼できない？
10 年前から地球の気温は何度上がっているの？
邪馬台国はどこにあるの？

オヤカク...
「自分で決められない人間」に成長してしまう最大の要因は、子どものうちから「自分で自分のことを選択する」経験が圧倒的に少ないことが要因



そういう意味では、自己調整学習、先生の役割もコーチングが必要というふうにいわれています。導くわけではなくて、下から支えるということですよ。状況を変えたい、目標を達成したいと思っている人に応援をするという形がコーチングですけれども、こんな形ですよ。いつも質問をする。なぜで聞く。そうすると、え、そんなこと思ってたなかった、なぜかなと思って整理をし、回答すると、もう一度、先生が、じゃ、ここはどうなっているのというふうに質問する、考えると。どんな手を使ってでも、子どもたちや生徒を考えさせるのが、先生の仕事だというふうに私は感じているということでございます。これ、きょうは時間の都合がないのですっ飛ばしていきますけども、こういうのがコーチング理論ということになりますね。

じゃあ、どうしたらいいの、何をしたらいいの。how と what のところです。ここから先はまさに、プロフェッショナルである先生がたへの宿題という形になります。今日の話を、ぜひ、先生がたの日々の中に落とし込んでいただいて、そして何かでもちょっと使えることを、まずやってみる。これも実は先生がたのオートノミーのところだと、

私は思っているんですね。自己調整学習っていうのは、子どもたちがすべきことではなくて、社会人の学びのスタイルでございますので、ぜひ、先生がたも、先生がたとして成長するっていうことの根底に、先生がたの非常に強いウィルの部分と、そしてそれをどうやって戦略として行っていくかというオートノミーの部分、この二つを考えていただきたいと思います。

おわりに

今日、私がお話したのは、なぜ自律性が必要なのか、教えて学ぶ、教えて学ぶをずっと繰り返していたら、教えてくれなければ学べない子どもができてしまう。それは、社会が大きく変化している今の時代にとっては、先ほどの **social pain** のところが大きくなる学校教育の在り方です。学校は、子どもたちが、大学を卒業した 22 歳以降、ハッピーに暮らす土台をつくる場所なんですね。そういう意味では、自律的学習者、つまり教えられなくても自分自身で学んでいく、そういったような訓練を、私は小学校 1 年から大学 4 年まで訓練するところだというふうに思っています。でもそのためには、インディペンデントのほうで、なりたい自分とかやりたいこととか問いとか、そういうものが必要ですね。

まとめ

- ・ 社会の在り方が大きく変化⇒子どもたちは VUCA の時代に生きる
- ・ 学校は、教えられるところではなく、自律的学習者になる訓練をするところ
- ・ そのためには自分からあふれ出る「なりたい自分」「やりたいこと」「問い」が必要⇒それをやっていいという許可が必要
- ・ WILL を必要とする学びかどうか、学習の目標に当てはめてデザイン
→教科教育と探究のメリハリ
- ・ 「なりたい自分」「やりたいこと」「問い」を生むには訓練が必要
- ・ 自律的になるためには手段・方法の技術を得る訓練が必要
- ・ 探究活動を有効に活用
- ・ 教師の役割の見直し
- ・ 教師の働きかけ、主体性の育成、問いの育み、いずれも長い時間が必要

そして、それだけではなくて、教科教育のところで、習得・探究の部分では、当然ながらそのウィルといったようなものがない場合もあります。私は、実は学びを二つの系統に分けていて、ウィルを必要とする学びかどうか。そういったようなものを学習目標に当てはめて、その二つがうまくスパイラルで絡んでいくような形でデザインをしたい。これがカリキュラム・マネジメントの話だ

というふうに思っています。教科教育と探究のメリハリって言いましたけれども、目的が似てしまう。これが一番子どもたちにとってはまずいので、しっかりと教育目標を区別しながら、それが連携するような形を組むということですね。

自律的になるためにはウィルが必要なんですけれども、ウィルがない場合でも、手段や技術の方法、訓練が必要です。そしてウィルのためには探究活動を有効に利用していただいたり、そのためには先生がたのサポートの仕方も大きく変わっていく。いつでもこういう授業をやってくださいというわけではございません。だけれども、こういうことが重要だということを、きょう、先生がた、ご理解いただきましたので、授業の中のどの部分にどのぐらいの割合で入れていくか。こういったようなものも、先生がたのお力の一つなのかなというふうに思っています。

ということで、私のほうからは以上でございます。本日は長い時間、お聞きいただきまして、ありがとうございました。